

2006年8月24日(木)共励会ジョイントキャンプ朝の礼拝

奨励『共に座す』若月健悟(日本基督教団国分寺教会牧師)

聖書 詩編 133 編

詩編 133 編は、巡礼の歌(シオンの歌)と呼ばれる。内容は、兄弟和合の教訓を示す。この詩編の背景には、つぎのような事情があったものと考えられている。

バビロン捕囚から解放され、エルサレムに帰還したものの、周辺には捕囚の地に連行されなかったかつてのイスラエルの残留民がいたため、両者の間には複雑な感情の対立があった(イザヤ書 66 章 2 ~ 17 節)。帰還した人々にとっては復興と再建のために残留民は大きな妨げとなり、分離が必要とされた。そのような危機の中から兄弟和合を祈りつつ成立した詩編であると考えられる。

言葉の意味としては、幾つか考えてみたい。1 節「兄弟」とは、肉親の兄弟と考えられるが、他には、宗教的な意味として「信仰の兄弟、教団」を指し、共同体に属する民の長老たち、または祭司団(アロンの家の人々)が考えられる。「共に座っている」とは、「共に住む」、「共に礼拝をささげる」とも訳される。父の死後、兄弟が別れることなく、仲良くして一緒に住み、共に礼拝をささげて和合して生きることの美しさを歌う。2 節「かぐわしい油」とは、「良い(トーヴ)油」のことで、油が滴り落ちることは神の祝福が満ちていることを表す。3 節「ヘルモンにおく露のように」とは、神の祝福のしるしを表し、上から下へと方向付けられている。このことの意味は、祝福と命が神から降ることをとおして、兄が弟をかえりみることにある。兄弟が仲良く座す(住む)所、つまり親から受け継ぐ嗣業をともに守っている光景に美しさを表す。

旧約では、兄弟が相争う物語が多く描かれている(カインとアベル、ヤコブとエサウ、ヨセフとその兄弟たち、アブサロムとその他のダビデの息子たちなど。なお新約でも「放蕩息子のたとえ」には兄弟間の不一致が示される)。これらのことから、兄弟の和合、共同体の一致は一つの理想であり、実現することが神の祝福と命を受けることであることが示される。

わたしたちは、旧約で理想とされた兄弟の和合と共同体の一致、世界の平和を主イエス・キリストの十字架において実現されていることを知る。わたしたちは、このゆえに既に実現された主イエス・キリストの救いと平和にあずかっていることを証しすることへと導かれている。

ある葬儀でのことである。

教会員ではなかったが、教会とは親しい交わりをもたれたご家族のご主人が召天された。ご夫人より依頼を受けて葬儀を教会で執り行なうことになった。前夜式を夕べにひかえ、ご遺族、ご親族もそろい、後は、式を待つばかりとなったときのことだった。

召天された方の妹さんより、思いもかけない話を伺った。天に召されたお兄さんは、その上に兄がいて、四人兄弟姉妹として過ごしたが、一番上の兄と召された二番目の兄が、長い間仲たがいをし、まったく口をきかないまま、数十年が過ぎてしまった。とうとう、和解することもなく、二番目の兄が召天し、もはや和解のすべもなくなった。

召天した方の妻は、「長兄には来て欲しくない、それが夫の気持である」といい、家族も皆それに同意した。葬儀を教会で執り行なうことは、召された方もそれを願っていたことでもあったので、スムーズにことが運んだが、問題は、折角、教会で葬儀を執り行なうのに、召された方の兄がこの場にいないことが、妹さんとしては、どうしても心穏やかではなく、いろいろと間際まで、長兄への連絡を遺族と交渉した。ようやく、召された方の息子さんより、長兄へ、亡くなったことだけ伝えることが決まり、召天してから前夜式まで、四日間の余裕が幸いして、前夜式の朝、ようやく電話で連絡を入れることができた。

八十歳も半ばとなった長兄は、間もなく八十歳になろうという弟の前夜式に間に合い、棺の中の弟と数十年ぶりに対面することになった。棺の中の弟の穏やかな顔を見つめながら、「すまなかったなあ」と、兄としてあまりにも心頑なであったことをしみじみと謝っておられる、その眼には涙があふれていた。

妹さんから話を伺い、あらためて棺の傍らに立つ、長兄の姿を見ながら思った。兄弟が今、ようやく共に座す幸いを神さまからいただいたと。

葬儀もすべて滞りなく終了した後、一人の人の死の重さが心に強く残った。

主イエス・キリストにあって、罪ゆるされ愛されていることの喜びと祝福を思う。どのような罪もゆるされないことはない、とあらためて知った。

兄弟が共に座す、これは、わたしたち家族も教会も隣人においても同じことではないか。主イエス・キリストにあって一つとなって共に座す祝福を歩みたい。